

欧州成層圏オゾンシンポジウムの紹介

オゾン研究連絡会世話人一同*

1. はじめに

オゾン研究連絡会では関連する国際ワークショップ・シンポジウムの簡単な紹介を不定期に行っています(2001年7月号の情報の広場を参照)。今回は標記シンポジウムです。

2. EORCU (European Ozone Research Coordinating Unit)

まずはじめに、このシンポジウム開催のための調整を行っている EORCU について紹介する。EORCU はヨーロッパ諸国の成層圏オゾン研究を調整するための機関として1989年4月に設立された。イギリスの Cambridge 大学に本拠を置き、現在は Neil Harris 博士を長として、同大学教授の John Pyle 氏や南極オゾンホールを発見者の1人である Joe Farman 氏などのスタッフから構成されている。なお運営資金は European Commission (EC) の Research DG (Directorate-General) により支援されている。

主な活動としては、国際シンポジウムの開催の他に大規模な観測キャンペーン(主に気球観測)の調整役も担っている。1991/1992年冬に行われた EASOE (European Arctic Stratospheric Ozone Experi-

ment), 1994年と1995年に行われた SESAME (Second European Stratospheric Arctic and Mid-latitude Experiment), そして1997/1998年冬から2000年12月にかけて行われた THESEO (Third European Stratospheric Experiment on Ozone) がそれに当たる。

現在は EC の 5 つの成層圏研究群 (European Stratospheric Research Clusters) のもと、様々な観測・モデルプロジェクトが行われており、これらを調整している。なお、5 つの研究群は ATUV (ATmospheric UV radiation), CORSAIRE (COordination of Research for the Study of AIRcraft impact on the Environment), GATO (Global ATmospheric Observations), OCLI (Ozone-CLimate Interactions), そして SOLO (Stratospheric Ozone LOss) である。

3. シンポジウムの歴史

第1回は1990年10月にドイツ南部の Schliersee で開催された。この会議ではそれまでの北極オゾン破壊についての結果や大規模に実施される初めてのヨーロッパキャンペーンである EASOE の目指すサイエンスについて議論された。この時、日本からは当時名古屋大学太陽地球環境研究所の近藤豊氏と小池真氏が参加した。

第2回、第3回のシンポジウムは各々1992年と1995年の秋に同じく Schliersee で開催された。ちょうどそれらは、EASOE と SESAME の直後にあたっており、それらのキャンペーンの観測結果について議論された。日本からは EASOE と SESAME の両方に参加した先述の名古屋大学太陽地球環境研究所のメンバーなどが参加した。

Schliersee での最後の開催となった第4回(1997年9月)は参加者が350名を超え、日本からも国立環境研究所 ILAS チームメンバーなどを中心に6名が参加し

* 笠井康子, KASAI Yasuko (通信総合研究所・SMILES グループ)。

川上修司, KAWAKAMI Shuji (宇宙開発事業団・地球観測利用研究センター)。

河本 望, KAWAMOTO Nozomi (宇宙開発事業団・地球観測利用研究センター)。

杉田考史, SUGITA Takafumi (国立環境研究所・成層圏オゾン層変動研究プロジェクト)。

村田 功, MURATA Isao (東北大学大学院理学研究科)。

© 2003 日本気象学会

た。この会議では1996/1997年のそれまで最大の北極オゾン減少についてが主な話題となった。

第5回(1999年9月)はフランスのSaint Jean de Luzへと開催の場を移した。この会議ではTHESEOの話題が主であった。参加者は250名程度で日本からも2名が参加した。

そして第6回は2002年9月にスウェーデン、Göteborgで開催された。会議の内容についてはこの号のシンポジウム報告(351~356)を参照されたい。参加者は200名を超え、日本からも6名が参加した。

なお、シンポジウム開催後にはプロシーディングスがECからのAir Pollution Research Reportとして毎回出版されている。

ECの出版物についてはCORDIS(Community Research and Development Information Service)のデータベースに登録されている。

謝 辞

本文の作成にあたり、内容校閲・情報提供して頂いた近藤 豊氏(東京大学先端科学技術センター・教授)と小池 真氏(東京大学大学院理学系研究科・助教授)にこの場を借りて感謝致します。

参考 URL

CORDIS : <http://dbs.cordis.lu>

EORCU : <http://www.ozone-sec.ch.cam.ac.uk>

事務局だより

会費等の納入方法について (気象庁職員の会員の方々へのお願い)

気象学会の会費等の納入については郵便振込みや郵便貯金口座からの引落とし等により行っていただいておりますが、多くの気象庁職員の会員の方々(既に個人納入の手続きをされた方は除きます)からは各官署(部、課)で取りまとめて集金・納入をしていただいております。

しかし、この方法ではまとめていただく方の負担が大きく、改善する必要がありました。そこで、気象庁職員の会員の方々への会費等の納入については、今後次の方法により納入していただくことにしたいと計画しました。

(1) 各官署(部、課)で会費等を取りまとめて集金・納入することは、今後原則として取り止め、各個人により納入していただくこととします。

(2) 納入方法としては、郵便貯金口座からの引落としや郵便局からの振込み、その他の方法から各自選択していただきます。

このため、6~8月に気象庁職員の会員の方々には照会を行って納入方法を決めていただき、本年末の会費請求時からの実施を予定しています。各位のご理解とご協力をお願いします。

なお、気象庁の職員以外の会員の方々においても、現在郵便局からの振込に拠っている方は郵便貯金口座等からの引落としによる方法(引落としによる方法の方が、手数料が掛らず、振込手数料も不要です)への移行をお勧めします。気象庁の職員以外の会員の方々への照会は特に行いませんが、ご希望の方は事務局までご連絡下さい。

(社) 日本気象学会事務局

tel ; 03-3212-8341ext2546

fax ; 03-3216-4401

e-mail ; metsoc-j@aurora.ocn.ne.jp